

音のまにまに

1 Music Life ONE

「あなたのハートには何が残りましたか?」。30代後半以降なら印象に残っている、テレビ東京の「木曜洋画劇場」で知られるこのセリフ——そう、木村奈保子さんだ。自らバンド活動をし、現在管楽器奏者に人気爆発中の楽器ケースNAHOKをデザインする木村さんは、とてもパワフルな女性。どんなところにも向かっていくバイタリティーあふれた彼女の最新連載「音のまにまに」がスタートします。



リゾート地、アナハイムで行なわれたLAメッセ

2014 ロスより楽器フェア報告

私はもともとスポーツより、ダンスが好きだったことから、音楽や映画との関わりが深くなった。

海外では、ダンスクラブでなくとも、レストランやパーティで踊るタイミングが多々ある。

音に身を任せることに慣れているから、誰でも自然に楽しく体を揺らしている。

日本では、音に反応するよりも、ステップ重視で、振り付けが好き南国だと感じる。

振付ダンスは、一つ間違えると体操みたいな動きになり、音が先行しない。

そういうダンサーを見て、ときどきげんなりすることがある。

ダンスは、いろいろなダンス映画でも語られてきたように、音を体で感じる。

音のまにまに、体が動く瞬間が美しい。逆に、プロモーションビデオを制作していた私は、普通に歩く人のバックに、音をつけることで、その人が踊っているように見える演出をしたことがあり、テクノボウの人間にリズムが加わると、それはそれは素敵に見えることを実感したものだ。

さて、楽器ケースを作るようになってから、楽器フェアに参加しているが、ブースでは自分のバンド演奏ももちろん行なえるときは行なうし、ほかの演奏者の音を聴くのも楽しい。

まさに、音のまにまにビジネスが行なわれている。だから、楽器関連の企業ではみなさん、営業マンとはいえども、演奏者が多く、遊び心を失わない。

今年は、ロサンゼルス楽器フェアにつづき、フランクフルトにも参加する。

LAでは、あのNAHOK(ナホック)ケース愛好者、ジュリアン・ボーディモンさんが欧州のリヨン歌劇楽団から、LAフィルへ首席フルーティストとして移籍されたこともあり、ウォルトディズニー・コンサートホールへと向かった。オケを囲むステージ設計で、私は演奏者の後ろ側、もっともプレイヤーの音が身近に聞こえるところに招待された。

オープニングにまず驚かされた。若手指揮者KRZYSZTOF URBANSKY(32歳)による演奏曲は、ヴォイチェフ・キラール(WOJCIECH KILAR)の「クセサニ(KRZESANY)」。映画「戦



木村奈保子

映画評論家、作家、演出家、NAHOKデザイナー
京都外大卒業。CBC局アナから映画評論家へ転身。
ゴールデンタイムの映画解説を17年間勤め、同時に演出家としてテレビ番組やファッションビデオの制作や、著作、講演なども多数手がける。昨今は、映画音楽の演奏活動やプロデュース、ダンス舞台の演出ほか、画期的な楽器ケースを研究開発、デザイン。文化的かつ、アントレプレナー(企業家)の資質で活躍する。



ウォルトディズニー・コンサートホール前で



シラ.Eのライブも行なわれたステージ



LA楽器フェアのもよう

場のピアニスト」やコッポラの「ドラキュラ」など映画音楽を手掛けている作曲家だけにポップというか、まるでフリージャズのような即興風の演奏から始まった。パーカッション6人のリズム隊は、楽しくてたまらないという盛り上がり方。そして、この楽団の特徴なのか、トータルバランスで圧倒的に弦楽器よりも管打楽器のパワーが強く、軽やかでアグレッシブ。さすがカリフォルニアの風!? 演奏終了後、ボーディモン氏に伺った。

「このオーケストラの持つ機能性、多彩な音の素晴らしさは言うまでもありません。特に素晴らしいのが金管セクションで、フレーズの表現がとにかく完璧。残念ながらフランスのオーケストラはこの点が異なります。私はしばしば、ハーモニクスのためにユニゾンなどのフレージングについて、チャレンジしなければならない時がありますが、これは異なる文化的背景、嗜好性を持ったプレイヤーと一緒に音楽をするのですから難しく当然です。

実際、このオケでは、ボーディモン氏の音色が見事に浮き彫りにされ、欧州バロック育ちの重厚さを感じさせた。それでも謙虚な言葉で語るボーディモン氏は、ヨーロッパとアメリカのオーケストラの違いについてさらに語った。

「やはり違う文化的背景を持ったオーケストラは違うスタイルを持っています。特に、音楽表現においては、感情表現に大きな違いがあり、「どんな指揮者の場合でも、ここはこういうふう演奏する」というコンセンサス(大前提)がまず違います。例えば、モーツァルトのフレージングで、フレーズの終わりはデクレッシェンドでまとめる一方、アメリカのそれは最後まで同じテンションが継続します。フルートに限って言えば、フランス系のフルートは明るめで色彩豊かな音が好まれるのに対して、アメリカではフォーカスされたヴィブラートで力強くオープンな音が好まれるようです。十分に異文化を楽しみ、音楽家として安定した生活を得たボーディモン氏は、LAフィルに移籍したことを、まさに「アメリカンドリーム」と語った。

しかし、彼がラッキーというよりも、欧州の伝統を踏まえた本人の実力により、むしろLAフィルの音の幅を広げたのではないかと思います。際立った演奏に私は聞こえた。

音による文化の相違は、実に面白い。

最後に、熱く教える真面目な先生としても定評のあるボーディモン氏が、日本の生徒に思うこと。

それは、「フィンガリングのテクニックなど、他国の生徒に比べるととても上手。でも彼らは間違いを恐れるあまりチャレンジをしない。それは教育方法の問題で、18歳までは同じ実力で、そのあとが伸びにくいということが多々ある」ということ。型にはめようとする日本人気質と教育の問題か。

今回のLAフィルは、オープニングのあとも、話題の実力派美人ピアニスト、KHATIA BUNIATISHULIのショパン『ピアノコンチェルトNO.2』のゲスト出演があり、ステージの演出は華やか。ハリウッドの楽団は、やはりハリウッド映画のエンターテインメントテイストに通じるものがある。

翌日私は、ブルースの神様、フィル・アップチャーチ氏の家に招待され、彼の演奏で私の歌を録音してもらおうプランまであったのだが、家に到着するなり風邪でダウン。なんと音の神様に見放されたのだ。ソファで奥様に看病されながら、ときどき漏れ聞こえる彼らのサウンドに耳を傾けると、神の声が聞こえた気がした。

「お前の歌は、まだまだや! 出直してきなはれ」。

今日も音楽家への敬意を表して……。



ギタリストのフィル・アップチャーチ氏(左)と歌手で女優の奥様(右から2人目)と共に

Pick Up PHOTO

「NAHOKのケースカバーは本当に素晴らしい、ファッショナブルなカラー、品質、デザインの革新性、それに、湿度対応があって音色が変わらない! これは世界一。LAフィルの同僚もいい!とってくれて、みんなうらやましがっているよ」と、ここまで言ってくれたジュリアンさん。今回は、フルートとピッコロを重ねて、横置きにする「GM2」をご用命。パープルがお好きな色だそうで、さすが、フランス人! 今年はCD制作の予定があるそうで、楽しみです。

